

アカハラダカ 英: Chinese Sparrowhawk 学: *Accipiter soloensis*

1. 分類と形態

分類: タカ目タカ科

全長:	♂283.4±5.6mm (N=18)	♀299.7±8.1mm (N=31)
最大翼長:	♂192.5±4.8mm (N=19)	♀202.7±5.9mm (N=31)
尾長:	♂126.9±4.6mm (N=19)	♀135.5±5.5mm (N=31)
嘴峰長:	♂11.66±0.65mm (N=18)	♀12.98±0.50mm (N=26)
ふしよ長:	♂43.17±1.54mm (N=18)	♀43.78±1.53mm (N=29)
体重(成):	♂112.1±6.5g (N=11)	♀131.7±22.4g (N=7)
(未成):	♂101.3±16.2g (N=7)	♀118.3±16.9g (N=24)

計測値はChoi et al. (2013)による。未成鳥は第3暦年以前の個体。



写真1. アカハラダカの成鳥雄(左), 幼鳥(第1暦年秋:中央), 第2暦年秋の個体(右:初列風切の最外側3枚が幼羽)。撮影:中山恵美子

羽色:

成鳥は雌雄とも頭部から上面は暗青灰色, 胸から腹の上部にかけてと下雨覆が淡赤褐色で, 外側初列風切は黒く, 腹下部は白っぽい。虹彩は, 雄成鳥は暗紅色で, 雌成鳥は黄色。幼鳥は体の上面と雨覆が暗褐色で, 褐色の羽縁があり, 下面が白く, 前頸に暗褐色の縦斑, 胸と腹にハート形の横斑, 脇には太い横斑がある。第2暦年秋には初列風切の先端部が黒く, 最外側1~3枚が横帯のある幼羽のままであるが, なかにはすべて幼羽の個体もいる。幼鳥の虹彩はやや鈍い黄色で, 第2暦年春の渡り時期には成鳥と同じような色彩に変化している。

鳴き声:

求愛期には雌雄とも「キーキーキー」と鋭い声で鳴く。人や動物が巣の近くに侵入すると、「キキキキ」という警戒音を出す。渡りの最中はめったに鳴かないが, ツバメの群れを警戒して鳴いたのを聞いたことがある。

2. 分布と生息環境

分布:

中国の北部を除く東半分と朝鮮で繁殖し, 北限は中国東北地方南部で, ロシアのウスリー地方でも記録がある。越冬地はフィリピン, インドネシア, 中国南部, インドシナ半島, マレー半島。

日本では, 繁殖には失敗したものの, 2例の営巣記録がある。1つは1989年に島根県大社町で記録されたもので, 6月14日から, クリの木に営巣した つがいの求愛給餌, 交尾, 餌運搬などが観察されている(長廻 1990)。巣付近の木の伐採により 7月15日に営巣が放棄された。もう1つは1995年の佐賀県西有田町の事例である(大久保洋子氏 私信)。6月11日にムクノキの約10mの枝上で巣を補修している雌雄が

確認され, その後6月28日までは雌雄で抱卵するようすが観察された。しかし, カメラマンが集まったことにより, 巣は放棄された。

生息環境:

繁殖地でも越冬地でも低山や丘陵, あるいは平地の林に生息し, 林に隣接する水田や湿地など開けた場所で狩りをする。ロシアのケドロヴァヤ・パジ自然保護区における観察では, ツミの繁殖密度が高いときにアカハラダカは非常に少なく, 逆にアカハラダカが多くツミが少ない年もある。ツミは営巣に河畔高木林を好むが, アカハラダカは山の斜面の若いナラ・シナ二次林を好む。これはツミと営巣場所をめぐる競争の過程で定着した習性と思われる。また, アカハラダカは主に河畔林でカエルなどを採食し, 食物でもツミとは競合しない(Shibnev 1994)。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
越冬期		渡り		繁殖期			渡り				

繁殖システム:

一夫一妻で繁殖する。

巣, 卵:

韓国では, 水田を囲むようにある森林の林縁の樹木に営巣する。営巣する樹種は, マツ類, ミズナラ, カシ類などが多いが, アカシア, カキノキにも営巣し, 樹種の選好性はあまりないと考えられている(鴨川 1991)。樹木の幹から突き出る枝に, 緑の葉のついた小枝やつる植物を拾い集め, 皿形の巣をつくる。計測した2巣の大きさは, 外径33×26cmと40×40cm, 内径(産座)19cmと16cmの円形, 巣の高さの外側20cmと13cm, 産座17cmと6cmだったが, 通常はこれよりも大きい巣をつくることが多い(鴨川 1991)。巣間の距離は約300mで, 巣の高さは最も低かったものが地上2m, 高いもので約20m, 10m前後のことが多い。一腹卵数は4個が普通で, 最も少ないのは2個, 多いのは5個。卵全体は白色で, 淡褐色の汚れたような不規則な斑紋がある。計測した14卵の平均値は, 長径38.1mm, 短径が30.1mmであった(鴨川 1991)。

抱卵, 育雛期間, 巣立ち:

6月上旬から中旬に産卵する。韓国の慶尚南道梁山郡では, 6月10日前後に産卵することが最も多い。抱卵が始まって26-28日目に孵化する。孵化後17-23日で巣立つ。

渡り:

アカハラダカは日本で観察できるタカのなかで, 1か所で最も多くの渡りを観察できるタカである。秋は8月下旬から10月下旬にかけて九州西部から南西諸島を南下していく数万の群れが観察される。春は3月上旬から5月下旬にかけて北上するが, 秋に比べて群れは小さい。韓国の西南端に位置する紅島や黒山島では, 秋はほとんど通過しないが, 春は多いと現地の韓国国立公園渡り鳥研究センターの職員に聞いた。春は中国大陸東岸を北上するコースがメインなのかもしれない。

4. 食性と採食行動

主な食物はカエルで、クモ、大型昆虫、特に鱗翅類やその幼虫、甲虫、トカゲ、ネズミ、小型鳥類(ヒクイナよりも小さい鳥)を捕る。鳥の捕獲はあまり成功せず、最初の襲撃に失敗すると獲物の追跡をやめる(Shibnev 1994)。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 長期継続されている渡りの調査

長崎県内では、1989年から日本野鳥の会長崎県支部が佐世保市鳥帽子岳で、1998年から中谷守氏と対馬野鳥の会が対馬市内山峠で、9月に1か月にわたるアカハラダカの渡りの調査が続けられている。

秋の渡りのピークは9月10-20日で、移動性高気圧に覆われた晴天の日にたくさんの群れが観察できる。朝鮮半島と対馬の間には朝鮮海峡の西水道があり、対馬と九州本土の間には東水道がある。そのため、対馬の内山峠では、前日に対馬でねぐらをとった個体の飛び立ちによる朝のピーク(図1上 緑)、朝鮮半島を飛び立った個体による昼のピーク(図1 橙)で通過の山が二山になることが多い。それに対して佐世保の鳥帽子岳では、午前10時頃までに九州本土の北松浦半島で前夜休んでいた群れが通過し(図1 青)、11-12時台に対馬からの群れ(緑)、13時以降に朝鮮半島からの群れ(橙)が飛来し、三山になることが多い。この通過時間と観察地点間の距離とを比較すれば、移動速度を推定できる。速度はその日の風の状況により変化するが、北寄りの追い風を利用し、上昇気流に乗りながら旋回と滑空をくり返した場合には、時速40km程度となる。付近の林にねぐら入りするのは15時以降のことが多いので、1日に約8時間飛んだと仮定すると、1日に320km前後は移動することになる。

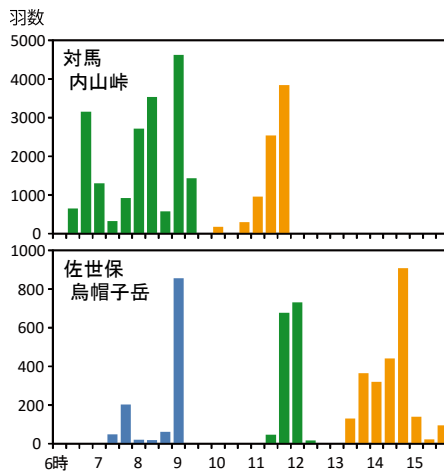


図1. 対馬内山峠と佐世保市鳥帽子岳における1998年9月15日のアカハラダカの通過状況。青は九州本土、緑は対馬、橙は朝鮮半島から飛び立ったと推測される群れ。

アカハラダカのシーズンの通過数が過去最多だったのは、1999年秋の内山峠で439,749羽(中谷 守氏 私信)。台風通過後の9月25日には338,748羽が通過し、10時35分から1時間のあいだに約24万羽が通過した。

中谷守氏や対馬野鳥の会の調査によると、対馬では1998年からの9月中の平均通過数は約10万羽で、鳥帽子岳では約24,000羽である。対馬から海上に飛び出すときに分散し、鳥帽子岳の通過数が少ないのだと思われる。

● 個体数の減少とエルニーニョ現象の影響

鳥帽子岳の通過数は1996年の62,516羽をピークに減少傾向にある。繁殖地の韓国では食物のカエルが年々減少しており(鴨川 1993)、主な越冬地のインドネシアの森林火災も減少の要因ではないかと思われる。

インドネシアは森林の年間減少面積は、ブラジルに次ぐ2位で、大規模農地開発とともに森林火災の多発により、森林が減少している。大規模な森林火災は乾季(5月から10月)の降水量が少ないときに発生するが、雨季(11月から4月)になり大量の雨が降れば、沈静化する。しかし、雨季の遅延や少雨ともなると、数ヶ月にわたって燃え続け、広大な森林が失われる。エルニーニョ現象が発生すると、インドネシアでは雨季が遅延し少雨になる。気象年鑑によると、エルニーニョ現象が発生したのは1991、1997、2002、2009年で、鳥帽子岳の翌秋の通過数はいずれも大きく減少していた。したがって森林火災とそれに伴う煙害は、林に生息し、隣接する水田や湿地で狩りをするアカハラダカの生息数を減少させているのかもしれない。

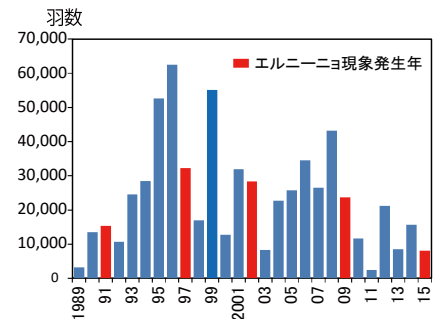


図2. 鳥帽子岳の通過個体数とエルニーニョ現象発生年との関係

6. 引用・参考文献

Choi C-Y, Nam H-Y, Park J-G, Bing G-C, Park C-U & Cho S-Y. 2013. Morphometrics and Sexual Dimorphism of Chinese Goshawks (*Accipiter soloensis*). J Raptor Res 47: 385-391.

鴨川誠. 1991. 続アカハラダカ *Accipiter soloensis* の生態調査研究 一形態的特徴・繁殖・春秋の渡り-. 長崎県高等学校教育研究会理科部会理科会誌 (30): 27-42.

鴨川誠. 1993. アジアにおけるアカハラダカ *Accipiter soloensis* 個体群の季節移動に関する調査研究. 長崎県高等学校教育研究会理科部会理科会誌 (32): 35-44.

森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1985. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.

長廻哲雄. 1990. 表題なし(アカハラダカの初繁殖失敗に関する報告) 読者コーナーへの投書. アニマ18(4): 106.

Shibnev Y.B. (藤巻裕蔵 訳). 1994. アカハラダカの生態. 極東の鳥類11 ワシ・タカ・フクロウ特集: 58-63. 極東鳥類研究会, 帯広市.

執筆者

馬田勝義 日本野鳥の会長崎県支部会員

1988年から始めたアカハラダカの渡りの観察も28年が経過した。発表の機会でもないとなかなか結果をまとめないが、渡りと気象の関係を調べて、通過数の予報ができるようになりたいものだと思う。

